日本文学名作选

曾田和子 揭侠 主编

NLIC 2970658279

天津大学出版社

日本文学名作選

北海道大学図書館
曽田和子藏書
NLIC

揭侠

NLIC 2970658279

图书在版编目(CIP)数据

日本文学名作选:日文/(日)曾田和子,揭侠主编.—天津:天津大学出版社,2010.10

ISBN 978-7-5618-3727-6

Ⅰ.①日… Ⅱ.①曾… ②揭… Ⅲ.①文学-作品-简介-日本-日文 Ⅳ.①I313.06

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2010)第 184649 号

出版发行 天津大学出版社
出 版 人 杨欢
地　　址 天津市卫津路 92 号天津大学内(邮编:300072)
电　　话 发行部:022-27403647　邮购部:022-27402742
网　　址 www.tjup.com
印　　刷 昌黎太阳红彩色印刷有限责任公司
经　　销 全国各地新华书店
开　　本 148mm×210mm
印　　张 17.5
字　　数 678 千
版　　次 2010 年 10 月第 1 版
印　　次 2010 年 10 月第 1 次
定　　价 32.00 元

凡购本书,如有缺页、倒页、脱页等质量问题,烦请向我社发行部门联系调换

版权所有　　侵权必究

前　言

教育部外语专业教学指导委员会制定的日语专业教学大纲中指出。日本文学课是日语专业的主干课之一、它包括日本文学作品选读、日本文学史、日本文学鉴赏等课型。三江学院日语专业从二〇〇四年起开设了『日本文学史』和『日本文学作家与作品』、主要使用了兄弟院校编撰的教材。

但是、在教学过程中我们发现原有教材排印错误颇多且内容比较陈旧、因此往往只得影印一些作品或资料来加以替代、日积月累这逐渐形成了一个特别希望学生阅读的作品群。于是、我们就产生了独自编写一部日本文学教材的动议并且立即付诸了行动、前后历时三年。

本书充分考虑了名家与名篇的应有位置、顾及了日本近现代文学的各个流派，并且收录了部分评论、戏曲和诗歌。

编写组的成员为这部书的出版、付出了艰辛的劳动、贡献了宝贵的智慧、尤其曾田和子老师为了以上目的更是殚精而竭虑。

愿它能成为一部学习日本文学的可以信赖的教科书、同时希望它能给同行们带来一丝新鲜感。

揭　侠

二〇〇九年十二月

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

日本文学名作選

目次

近現代文学

小説

たけくらべ　樋口一葉　一
金色夜叉　尾崎紅葉　一〇
舞姫　森鴎外　一五
高瀬舟　森鴎外　六二
三四郎　夏目漱石　八二
こころ　夏目漱石　一〇二
破戒　島崎藤村　一四六
《参考》一〇〇年経た『破戒』の今昔　川端俊英
刺青　谷崎潤一郎　一六七

伊豆の踊り子　川端　康成　一八二
蠅　横光　利一　二二二
羅生門　芥川龍之介　二三二
《参考》『今昔物語』巻第二十九第十八
羅城門の上層に登りて死人を見たる盗人の語
『今昔物語集』巻第三十一第三十一
太刀帯の陣に魚を売る嫗の語
蟹工船　小林多喜二　二五二
《参考》『蟹工船』解説　村山友義
清兵衛と瓢箪　志賀　直哉　二七二
《参考》個性という名の「自然」
富岳百景　太宰　治　二八二
野火　大岡　昇平　三〇一
黒い雨　井伏　鱒二　三一三
《参考》「井伏さんの祈りとリアリズム」大江健三郎
ナイン　井上ひさし　三四七

随筆

雨の萩　幸田　文　三六〇
陰影の美　谷崎潤一郎　三六五
幸福　安岡章太郎　三七一

戯曲

夕鶴　木下　順二　三八四
花いちもんめ　宮本　研　四二〇

評論

無常ということ　小林　秀雄　四四一

詩

永訣の朝　宮沢　賢治　四四八
《参考》雨ニモマケズ　会田　綱雄
帰郷　中原　中也　四六〇
《鑑賞のために》中原中也「帰郷」について　吉野　弘

甃のうへ　三好　達治　四六七
《鑑賞のために》「甃のうへ」について　村野　四郎
わたしが一番きれいだったとき　茨木のり子　四七一
《鑑賞のために》「わたしが一番きれいだったとき」　高橋　順子
I was born　吉野　弘　四七七
《鑑賞のために》「I was born」　茨木　のり子
「I was born」――「私の二十歳の詩」という詩集に寄せて　吉野　弘
シジミ　石垣　りん　四八三
《鑑賞のために》「シジミ」について　大岡　信
かなしみ　谷川俊太郎　四八六
《鑑賞のために》「かなしみ」　茨木　のり子
わたしを束ねないで　新川　和江　四九〇
《鑑賞のために》「わたしを束ねないで」について　高橋　順子
見附（みつけ）のみどりに　荒川　洋治　四九五
《鑑賞のために》「見附のみどりに」について　高橋　順子
《参考》藤村詩集　序　五〇二

古典文学

源氏物語　紫式部　村山　りう『私の源氏物語』　五〇五
古今和歌集「仮名序」　紀貫之　五一八
枕草子　清少納言　橋本　治　桃尻語訳『枕草子』　五二一
方丈記　鴨　長明　五四一
徒然草　吉田兼好　五四五

近現代文学

小説

たけくらべ　樋口一葉

回れば大門の見返り柳いと長けれど、お歯ぐろ溝に灯火うつる三階の騒ぎも手に取るごとく、明け暮れなしの車の行き来に、はかり知られぬ全盛をうらなひて、「大音寺前と名は仏くさけれど、さりとは陽気の町。」と住みたる人の申しき。

このように始まる「たけくらべ」の舞台は、明治二十年代の東京、吉原界隈である。この町の子どもたちは、横町組と表町組とに分かれて日ごろから張り合っていた。龍華寺の信如は横町組、大黒屋の美登利は表町組であった。美登利はかねてから信如に好意を持っていたが、潔癖な信如は、友だちにあれこれ取り沙汰されたことを気に病み、それがもとで、二人の間にはなんとなくわだかまりが生じていた。

夏祭りの夜、横町組の大将長吉は、表町組に殴り込みをかけ、大将格の正太郎がいないので三五郎を袋だたきにし、美登利に泥草履を投げつけた。この夜、信如は長吉たちとはいっしょではなかったが、この事件以来、美登利は信如を恨むようになった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

信如[一]がいつも田町[二]へ通ふとき、通らでもことはすめども、いはば近道の土手[三]手前[四]にかりそめの格子門、のぞけば鞍馬[五]の石灯籠[六]に、萩の袖垣[七]をらしう見えて、縁先に巻きたるすだれのさまも懐かしう、中[八]ガラスの障子のうちには、今[九]様の按察[一〇]の後室が数珠をつまぐつて、冠[一〇]つ切りの若紫も立ち出づるやと思はるる、そのひと構へが大黒屋の寮なり。

昨日も今日も時雨の空に、田町の姉より頼みの長胴着[一一]ができたれば、少しも早う重ねさせたき親心、「御苦労でも学校前のちよつとの間に、持つて行つてくれまいか、定めて花[一二]も待つてゐようほどに。」と母親よりの言ひつけを、何もいやとは言ひ切られぬおとなしさに、ただ、「はいはい。」と小包みを抱へて、鼠[一三]小倉の緒のすがりし朴木歯の下駄ひたひたと、信如は雨傘さしかざして出でぬ。

お歯ぐろ溝の角より曲りて、いつも行くなる細道をたどれば、運悪う大黒屋の前まで来し時、さつと吹く風、大黒[一四]傘の上をつかみて、宙へ引き上げるかと疑ふばかり烈しく吹けば、これはならぬと力足を踏みこたゆるとたん、さのみに思はざりし前鼻緒のずるずると抜けて、傘よりもこれこそ一[一五]の大事になりぬ。

信如困りて舌打ちはすれども、いま

さら何と法のなければ、大黒屋の門に傘を寄せかけ、降る雨を庇に[一六]厭うて鼻緒をつくろふに、常々しなれぬお坊[一七]様の、これはいかなこと、心ばかりはあせれども、なんとしてもうまくはすげることのならぬ口惜しさ。じれて、じれて、袂の中から[一八]記事文の下書きしておいた大半紙をつかみ出し、ずんずんと裂きてこよりをよるに、意地悪の嵐またもや落とし来て、立てかけし傘のころころと転がり出づるを、「いまいましいやつめ。」と腹立たしげに言ひて、取り止めんと手を伸ばすに、膝へ乗せておきし小包み、[一九]意気地もなく落ちて、風呂敷は泥に、わが着る物の袂までを汚しぬ。

見るに気の毒なるは雨の中の傘なし、途中に鼻緒を踏み切りたるばかりはなし。美登利は障子の中ながらガラス越しに遠く眺めて、「あれ、たれか鼻緒を切つた人がある。母さん、きれをやつてもようございますか。」と尋ねて、針箱の引き出しから[二〇]友禅ちりめんの切れ端をつかみ出し、庭下駄履くももどかしきやうに、はせ出でて縁先の洋傘さすより早く、庭石の上を伝うて、急ぎ足に来たりぬ。

それと見るより美登利の顔は赤うなりて、どのやうの大事にでも遭ひしやうに、胸の動悸の早く打つを、人の見るかと[二一]背後の見られて、恐る恐る門のそばへ寄れば、信如もふつと振り返り

て、これも無言に脇を流るる冷や汗、はだしになりて逃げ出したき思ひなり。

常の美登利ならば信如が難儀の体を指さして「あれあれ、あの意気地なし。」と笑うて笑うて笑ひ抜いて、言ひたいままの憎まれ口、「よくもお祭りの夜は正太さんに仇をするとてわたしたちが遊びの邪魔をさせ、罪もない三ちやんをたたかせて、お前は高見で采配を振つておいでなされたの。さああやまりなさんすか、なんとでござんす。言ふことがあらば、陰のくすくすならでここでお言ひなされ、お相手にはいつでもなつて見せまする。さあなんとでござんす。」と袂をとらへて捲くしかくる勢ひ、さこそは当たり難うもあるべきを、物言はず格子の陰に小隠れて、さりとて立ち去るでもなしに、ただうぢうぢと胸とどろかすは、平常の美登利のさまにてはなかりき。

ここは大黒屋のと思ふときより、信如はものの恐ろしく、左右を見ずしてひた歩みにせしなれども、生憎の雨、あやにくの風、鼻緒をさへに踏み切りて、せんなき門下に紙縷をよる心地、憂きことさまざまにどうも堪へられぬ思ひのありしに、飛び石の足音は背より冷や水をかけられるがごとく、顧みねどもその人と思ふに、わなわなとふるへて顔の色も変はるべく、後ろ向きになりて、なほも鼻緒に心を尽くすと見せながら、半ばは夢中に、この下駄

いつまでかかりても履けるやうにはならんともせざりき。

庭なる美登利はさしのぞいて、「ええ不器用な、あんな手つきしてどうなるものぞ。紙縷は婆々縷、藁しべなんぞ前壺に抱かせたとて、長持ちのすることではない。それそれ、羽織の裾が地について泥になるはご存じないか。あれ傘が転がる、あれを畳んで立てかけておけばよいに。」と一々もどかしう歯がゆくは思へども、「ここにきれがござんす、これでおすげなされ。」と呼びかくることもせず、これも立ちつくして降る雨袖にわびしきを、いとひもあへず小隠れてうかがひしが、さりとも知らぬ母の親、はるかに声をかけて、「火のしの火が熾りましたぞえ。この美登利さんは何を遊んでゐる、雨の降るに表へ出てのいたづらはなりませぬ、またこの間のやうにかぜ引かうぞ。」と呼び立てられるに、「はい、今行きます。」と大きく言ひて、その声信如に聞こえしを恥づかしく、胸はわくわくと上気して、どうでも開けられぬ門の際に、さりとも見過ごしがたき難儀を、さまざまの思案尽くして、格子の間より手に持つきれを物言はず投げ出だせば、見ぬやうに見て知らず顔を信如の作るに、「ええ、いつものとほりの心根。」とやるせなき思ひを目に集めて、少し涙の恨み顔。「何を憎んでそのやうにつれなきそぶりは見せらるる。言ひたい

ことはこなたにあるを、あまりな人。」とこみ上ぐるほど思ひに迫れど、母親の呼び声しばしばなるをわびしく、せんかたなさにひと足ふた足、「ええ何ぞいの、未練くさい。思惑(おもはく)恥づかし。」と身を返して、かたかたと飛び石を伝ひゆくに、信如は今ぞ寂しう見返れば、紅入り友禅の雨にぬれて、紅葉の型のうるはしきが、わが足近く散りぼひたる、そぞろにゆかしき思ひはあれども、手に取り上ぐることをもせず、むなしう眺めて憂き思ひあり。

岩波文庫「にごりえ・たけくらべ」

「声に出して読みたい日本語」斉藤孝　草思社

★この作品には明治の東京下町を舞台に、美登利、正太郎、信如ら、思春期の少年少女の幼い恋や生活がみずみずしく描かれている。全編読んでみよう。

（注）

一　大音寺前　大音寺は、現在の東京都台東区竜泉にある寺の名。

二　田町　浅草田町。現在の台東区浅草六丁目。

三　土手手前　土手下の細い道。

四　かりそめの格子門　簡単な格子作りの門。格子門は、格子戸の付いた門。格子戸は、細長い角木を縦横に間を透かして組んだ戸。

五　鞍馬の石灯籠　京都で産出する鞍馬石（閃緑岩）で作った灯籠。

六　萩の袖垣　萩の枝で作った袖垣（庭のほうに突き出た、袖の形をした低い垣根。）

七　しをらしう　ここでは、優美に、の意。

八　中ガラスの障子　中央がガラスになっている障子。

九　今様の按察の後室　現代風の、按察の大納言の未亡人。「按察の後室」は、「源氏物語」に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com